

してゐるとは言はぬ。たゞそれ以上は著者にもわからないだけである。

また諸君は、それならばどんな音楽がいゝ音楽であるか、と聞くであらう。それも本當はわからない。誰にもいゝと思はれるやうな音楽は、恐らくまだこの世界には存在しない。どのやうな音楽が本當にいゝ音楽か、それは誰にもわからない。たゞ諸君がいゝと思ふ音楽をいゝと思つてゐるだけである。

また諸君は、或は程度まで音楽をやつてみて、これならば果して大成の見込みがあるか、どうだか、と聞きたからう。そしてそれはおそらく切に聞きたいものであらう。しかし誰も諸君にその事を答へてくれる人はない。たゞ自分が満足するまでやつてみるまでの事である。また或る諸君は、折角作りあげた自分の音楽が、多くの人に喝采されない時に、自分の方が正しいか、世の中の批評が正しいか、それに對して適確な判断がほしからう。しかし世の中には誰もそのやうな事を判断してくれる人はない。音楽の世界には、誰もそれを信じて疑はないやうな批評の標準は一つもない。或る音楽は、人によつて、よくもあるし、また悪くもある。

もし諸君がすべてこのやうなことを知つたならば、諸君は音楽の世界は一つの大なる渾沌の

世界だと思ふであらう。誠にその通りである。そして人間社會の事は、たゞ音楽に限らず、本當に渾沌としてゐないものが果してあるであらうか。そして藝術の世界は、——殊に音楽の世界は、誠に大きな渾沌の世界である。

音楽は結局は、たゞ盲滅法に、自分の信ずるとほりをやつてみるまでの事である。音楽には本當の永遠な法則はない。あるかもしれないが、それはまだ誰にも見つかからない。

二

「私は信ずる。藝術は能力から來ない。たゞ必然から來る。」——これはシェーンベルクの言葉である。音楽家もやはり必然的に音楽家に生れて來た人だけが成功する。それは誰もほとんど疑ふことの出來ない事實である。そして必然的に音楽家になるやうに生れて來なかつた人が、誤つて音楽家に志して、その一生を取りかへしのつかない事にしてしまつた例は、これまで世の中には數限りなくあつた。

音楽といふものは、少年や青年の心を捕へ易いものである。多くの少年は音楽を聞くと、

非常なおもしろさを感じる。おもしろいものは模倣してみたくなる。熱心に模倣すれば大抵の仕事はみな或る程度までは出来る。しかし音楽では、その程度を正しく判断してくれる人は極めて少ない。その時自分は相當に音楽に恵まれてゐるものであると思つて、音楽を自分の一生の仕事にしてみようと決心する人もあるであらう。そして或る程度まで修業をつゞけて、多少の素人ばなれのしたところで、自分はこれで音楽に志した目的を達したと思つて安心する人もあらう。殊に偶然の機會で、それだけの音楽でろくでもない教師にでもなつて、それで樂々と生活の費でも得られるならば、その安心は更に大きくなる。そして自分だけはこの安心の裡に一生を終る事が出来る。それももちろん結構なことであらう。しかし、もし明敏な頭を持つ人は、或る程度まで來ると、自分は到底必然的に音楽家として生れて來たのではないといふことに氣がつく。しかし氣のついた時には、すでに遅い。なまじかの音楽は、人の一生を滅ぼすものである。

讀者諸君。音が人の心を誘惑することは、昔から詩の絶好の題目とされてゐる。諸君はジレ

ーネの誘惑を知つてゐる。或はローレライの誘惑を知つてゐる。そして今の世にもローレライ

は到るところに住んでゐる。そしてその美しい音の誘惑で、諸君の一生を滅ぼさうと待ちかまへてゐる。諸君は音の誘惑に對して、出来るだけの注意を拂はなくてはならない。

殊に日本は、まだ音楽には多くの經驗を持つてゐない。音楽が日本の土地に芽生えてからまだ何年も経つてゐない。従つてそこにはまだ大きな批評家もなければ、教師もゐない。そして音楽にはまだ多少の物めづらしさといふ感じがぬけきつてゐない。そのやうなところこそ、正にローレライはその音の誘惑を思ふ存分に遅くする事の出来るところである。私は音の誘惑の犠牲者が成るべく少ないことを希望する。さう言ふこの本の著者自身が、すでに哀れなる音の誘惑の犠牲者でなくてそもく何であらう。

三

讀者諸君。この本は音楽を作ることの話で始終した。人の作りあげたものを演奏するといふことについては、あまり考へてみなかつた。この本を終る時でも、私はまだその事を考へてみようといふ氣はしない。私は演奏家といふものに多くの興味を持たない。

私は、本當に、演奏家といふものについて多くの興味を持たない。演奏家の事は私にはよくわからない。もし私が音楽に志すとしても、私は演奏家にはならうとは思はない。

もし私が音楽に志したとしたら、私は私自身の音楽を作るために努力する。精進する。人の作つたものをたゞそのまま演奏して、それで満足してゐようとは決して思はない。もちろん演奏家には演奏家の理窟がある。演奏家は或はさういふかも知れない。——たとへ曲は人が作つたものでも、その曲の演奏の仕方、その曲の解釋の仕方は自分のものである。我々は演奏といふことによつても、充分我々の心の中のを表現することが出来る。

讀者諸君。演奏家がさういふのも、もちろん全然間違ひだとは言はれない。しかしそれは程度の問題である。人の作つたものをたゞ演奏する事と、自分が音楽を作り出してそれを人に演奏させる事とは、その間に誰が考へても大きな相違がある。

私はベルリンで澤山のピアノの名人を聞いた。私は樂器の中ではピアノが一番好きである。ピアノの名人だけは、ほとんどあらゆる機會を利用して聞いたつもりである。私はアメリカでの名人は知らないが、しかしザウエルも聞いたし、ダルベールも聞いた。ラモンも聞いたし、

アンゾルゲも聞いた。フリードマンも聞いたし、ドナーニも聞いた。ドイツにゐる若い大家の數十人は大抵聞いた。ブゾーニのやうな老大家も、一度聞くには聞いた。しかし私はこのやうな澤山の名人を聞いて、最も深く感じた事の一つを私は今率直に諸君に話さう。それはピアノの名人といふものは、實は極めてはかないものであるといふ事である。ピアノの演奏からは、ほとんど個性は見出しにくいといふことである。諸君はこの事を大膽不敵な暴言のやうに思ふであらう。しかし私は極めて眞面目に諸君にさう言はうと思ふ。名人のピアノは、誰のを聞いても、まづ大抵同じやうなものである。似たり寄つたりのものである。

今私の頭の中では、もちろんザウエルとダルベールとはよほど違つて印象されてゐる。しかしその事はまだよく考へてみる餘地がある。その違ひは音楽に對しては或は第二義的なものかも知れない。まづダルベールといひ、ザウエルといふ名が違ふ。人の顔が違ふ。演奏會を聞いた場所も違ふし、時も違ふ。また會の空氣も違ふ。そのやうな事がこの二人を私の頭の中に違つたものとして印象させる一つの原因でないとは斷言出来ない。しかしそのやうな事をとりあげて考へるのは非常に滑稽だといふならば、次にはこの二人が選んだ曲目の相違といふ事があ

る。どのやうな曲目で一晩の演奏會をしようかといふ事は、演奏家にとつては誠に重大なものであらう。曲目の全體から、それ／＼變つた印象を受けるといふ事はそれはもちろん争はれない事實である。しかしそれも音樂といふものに對しては必ずしも第一義的だとは言はれない。

演奏についても、もちろん個人の違ひはある。同じベートーヴェンのゾナーテを弾くにしても、まづ曲全體の速さが違ふ。そのやうに部分部分での速さが違ふ。極端に言へば音一つ／＼の速さや長さが違ふ。また右手と左手の強さのつりあひが人によつてみな違ふ。また曲全體の強さ弱さの進行のぐあひも人によつて違ふ。そして何よりもひどく相違の目立つのは、恐らくペタルの使ひ方であらう。そのやうな音響學的な點で、人々の技術の相違のある事は、もちろん私はよく知つてゐる。しかし、たゞそれだけが人々の藝術の相違を作る客觀的な原因とするならば、それはあまりに貧弱すぎはしまいか。あまりに情なさすぎはしまいか。

また、ピアノの音をよほど神祕的に、感情的に考へる人は、あの機械的なピアノから、鍵盤のうち方によつてよほど變つた音が出るとも言ふ。そこに人々の藝術の相違の大きな客觀性を求めようとするものもある。そしてピアノの技術の上に打ち方といふ重大な一項目をも設けよ

うとしてゐる。しかしそのやうなものゝ本當の客觀的な存在については、私は甚だ多くの信用をおいてゐない。打ち方といふものに、それほど重大な個人の相違があらはれ得るといふならば、學證の責はまづそれを主張する人の方にある。

しかしそのやうな事は、ピアノの事についての話でないこの本で強ひて論陣を張る必要はない。ともかく私の印象の中には、ダルベールの弾いたベートーヴェンも、ザウエルの弾いたベートーヴェンも、同じ曲は同じ曲で、違ふ曲は違ふ曲である。私はベートーヴェンを聞いたとは思ふ。しかしザウエルやダルベールその人を聞いたといふ印象は、それに比べるとよほどうすくなる。ザウエルもダルベールもつまりベートーヴェンといふものゝ中に包含されてしまふ。もちろん、それは私自身がピアノ演奏家でないし、ピアノの名人の本當の聞き方を知らないといふ事にもよるであらう。しかし、もしさうだとすると、本當にピアノの名人を聞き、それからその名人の個性を明かに聞きわけ得る人が果して幾百人あるであらう。ピアノの名人は、たゞそのやうな特殊の人々だけに意味があるものになる。それも甚だ哀れな存在である。甚だ果ない存在である。

人は演奏の技術の方に新境地を求めようと試みたのであらう。そして演奏場での極めて花々しい光景は、それだけでもすでに若い人の感情を極度に昂奮させ、我も／＼と演奏家を志させるには充分であるかも知れない。名人の輩出といふ事にも、もちろん、或る痛切な理由はある。殊に日本ではこれから演奏家の時代が来さうにも思はれる。近年日本の若い人々のピアノの技術の發達は殊に著しい。それは日本の樂界のために極めて慶ぶべき事である。私はこの若い演奏家の將來を祝福する事にかけて、決して人後に落ちない。しかし、あらゆる理由を考へた後でも、もし私がこの演奏家と共に音楽に志すとしたら、果して私がピアノの技術だけを練習し、このピアノの技術こそは私の一生の仕事であると思つたか、どうかは、非常に疑問である。

私が音楽に志すならば、やはり私自身の音楽を作り上げたい。どうかは、非常に疑問である。境地を見出したい。人の作つた音楽を通して、それでやつと自分の感情や感想を、どうにかかうにか述べさせてもらふよりも、いつそ始めから自分自身の音楽を作り出したい。それこそ本當に自分自身のものである。もちろん人々には各々その適する處がある。誰を見ても、必ず一概にさうとも言はれないかも知れない。しかし私自身は音楽に志す人々のうちで、自分自身の

じょうきしは随まふん

音楽を作り出さうと努力する人に最も多くの期待をかける。

この本に述べた事については、どれを参考書として擧げてい、か、私にも判断がつかない。擧げたら限りが無い。擧げなければ擧げなくてもすむ。

ベートーヴェンの最初の作曲から作品第一番までの間の發達を辿つて見るのは、それは非常に興味がある。今知られてゐる限りの初期の作曲はベートーヴェン全集第一六卷、第一七卷、第一八卷、第二三卷、第二五卷に收められてゐる。實際の音楽上の技術については、その發達を叙すことは、——例へば和絃の種類で、どれが最初に用ゐられ、どれが割合に後まで用ゐられなかつたかといふやうな事は、——誠に興味のある事ではあるが、しかし話が全く専門的になつて、この本には適しない。ベートーヴェンの初期の作に於ける65の和絃といふやうな題目は、確に或る興味ある小論文になる。作曲の形式の發達も、それに劣らず興味がある。もし諸君のうちに、それについて研究を試みようとする人があるならば、恐らく相當の結果をあげうるであらう。東京では、ベートーヴェン全集は私共は麻布區飯倉の南葵音樂圖書館で見ることが出来る。

簡単にベートーヴェンの初期の試作の様子を知らうと思ふ人々は、まづゾナーテだけを見るのが早道である。それにはリーマンの名著『ベートーヴェンのゾナーテ』（マックス・ヘッセ）がある。

人の才能は一朝一夕でその發達の極には達しない。ベートーヴェンにしてなほ初めはこの様なゾナーテを作つてゐたかと思ふと、音楽に志す若い諸君は或は一時はその意を強ふ事が出来るであらう。

上野の芸術とは何か

成り下りしものには何もない

私生活は悲境であらうとも

芸術に精んずる気概が

美しいものだ

五五五

昭和四年七月五日印
昭和四年七月十日發行

【定價金壹圓六拾錢】

著者 兼 常 清 佐

發行者 小 林 勇

東京市神田區一ツ橋通九

印刷者 前 田 宗 松

【刷印社成文】

發行所

東京市神田區一ツ橋通九番地
振替東京一三七八九番

鐵塔書院

彼の種々の
大體是者

兼常清佐著書

音樂巡禮

大正十四年發行
定價二圓二十錢

岩波書店

ベートーヴェンの死

昭和二年發行
定價一圓八十錢

岩波書店

平民音樂人 シューベルト

昭和三年發行
定價二圓二十錢

岩波書店

音樂概論

昭和四年發行
定價一圓二十錢

岩波書店

兼常清佐著

西洋音樂史
日本音樂史

(豫告)

音樂史——さてどんなものが書けませうか。私はかつて多少型の變つた『音樂概論』を書きました。さうすると世の中には眞正直な人が案外多くて、こんなものは概論といふ漢字の題にはあてはまらない。そもそも概論といふ漢字の傳統的な意味は、——といふやうな事で書店の編輯部に覆々ねち込んだものださうです。それを見て悉く快哉を叫んだのは、その概論をこしらへた當人小林勇、即ち今の鐵塔書院主人です。早速私の處に押しかけて、お前あの手で一つ『音樂史』もやつてくれと來ました。

音樂史をもつ事は私共の刻下の急務です。よろしい、私も一つ私の型で音樂史を書きませう。幸にして私には萬事を擧げて信賴するに足る絶好の助手があります。腹案が定り次第、忽ち本に書き上げませう。そして諸君と同じ時代に生きてゐる一青年が、西洋の音樂の歴史について何を考へたかを諸君の前に披瀝させよう。

また諸君の大多數は清元と常盤津の區別、觀世と寶生の區別といふやうな事は全然知らないでせう。退屈な原始音樂に興味をもつ人は極めて些いでせう。しかし日本音樂史といふ形に纏つたら、そこから一種の淡い興味も湧かないとも限りません、西洋音樂史を書き終つたら、私と私の助手は必ず或る型の日本音樂史をも作るでせう。

出來たらどうぞ澤山買つてやつて下さい、少し早すぎますが、鐵塔書院主人に頼まれたので、この豫告を書いておきます。

兼常清佐敬白

寺田寅彦著

萬華鏡

四六判上製 定價壹圓八拾錢
二三〇頁 送料拾錢

齋藤茂吉著

短歌寫生の說

四六判上製 定價壹圓七拾錢
二三〇頁 送料拾錢

藤澤古實著

赤彦遺言

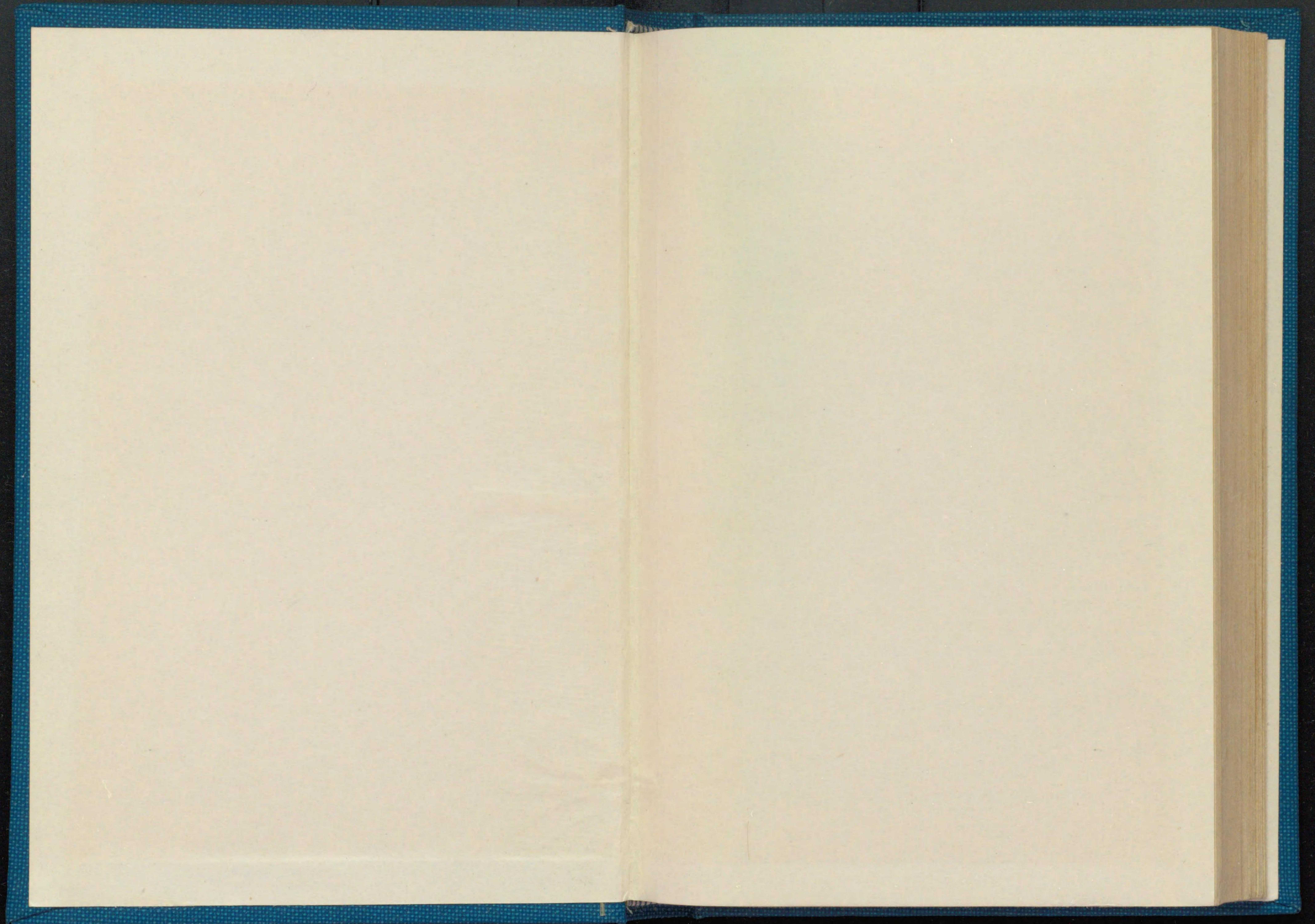
四六判上製 定價貳圓
三二〇頁 送料拾貳錢

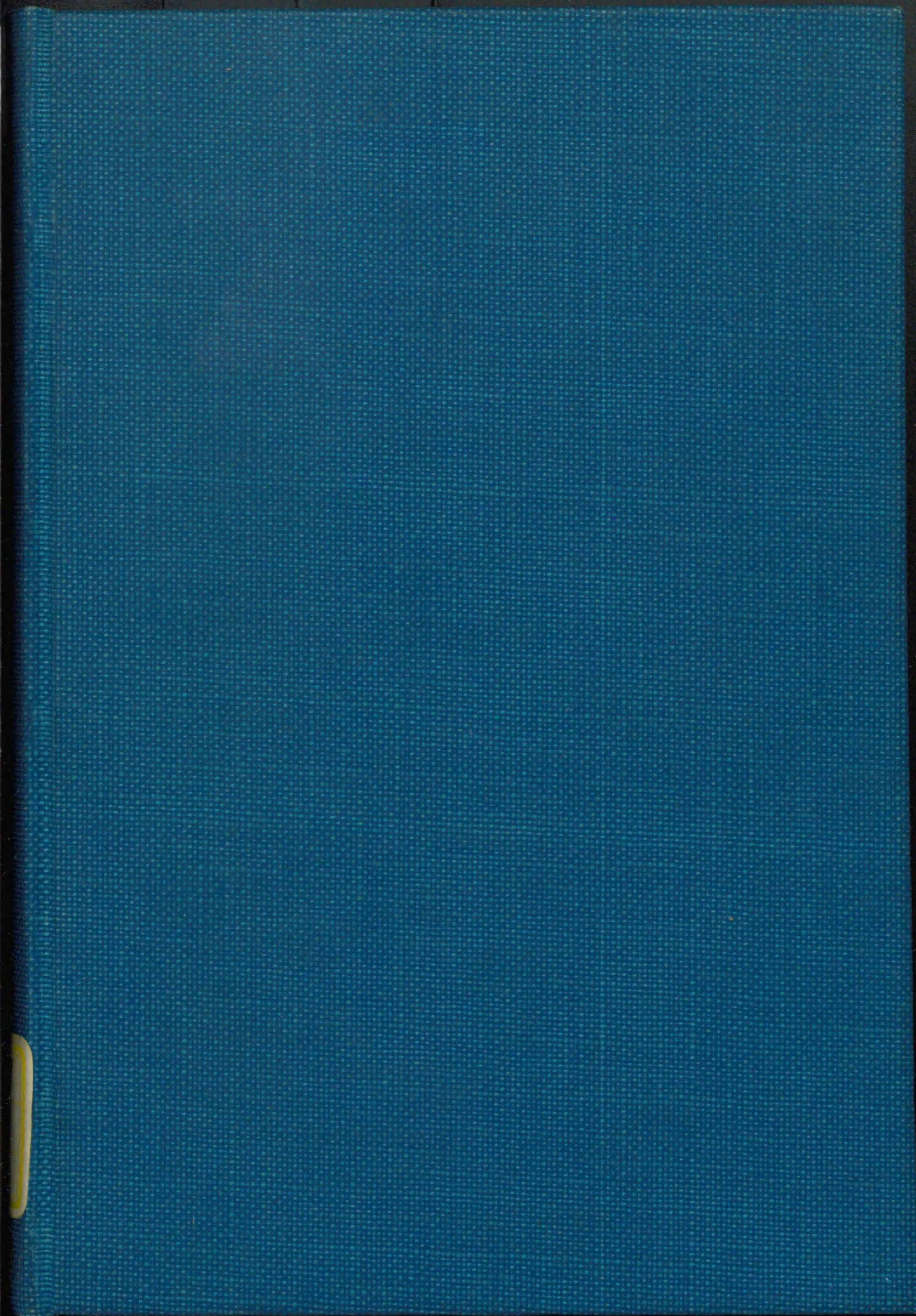
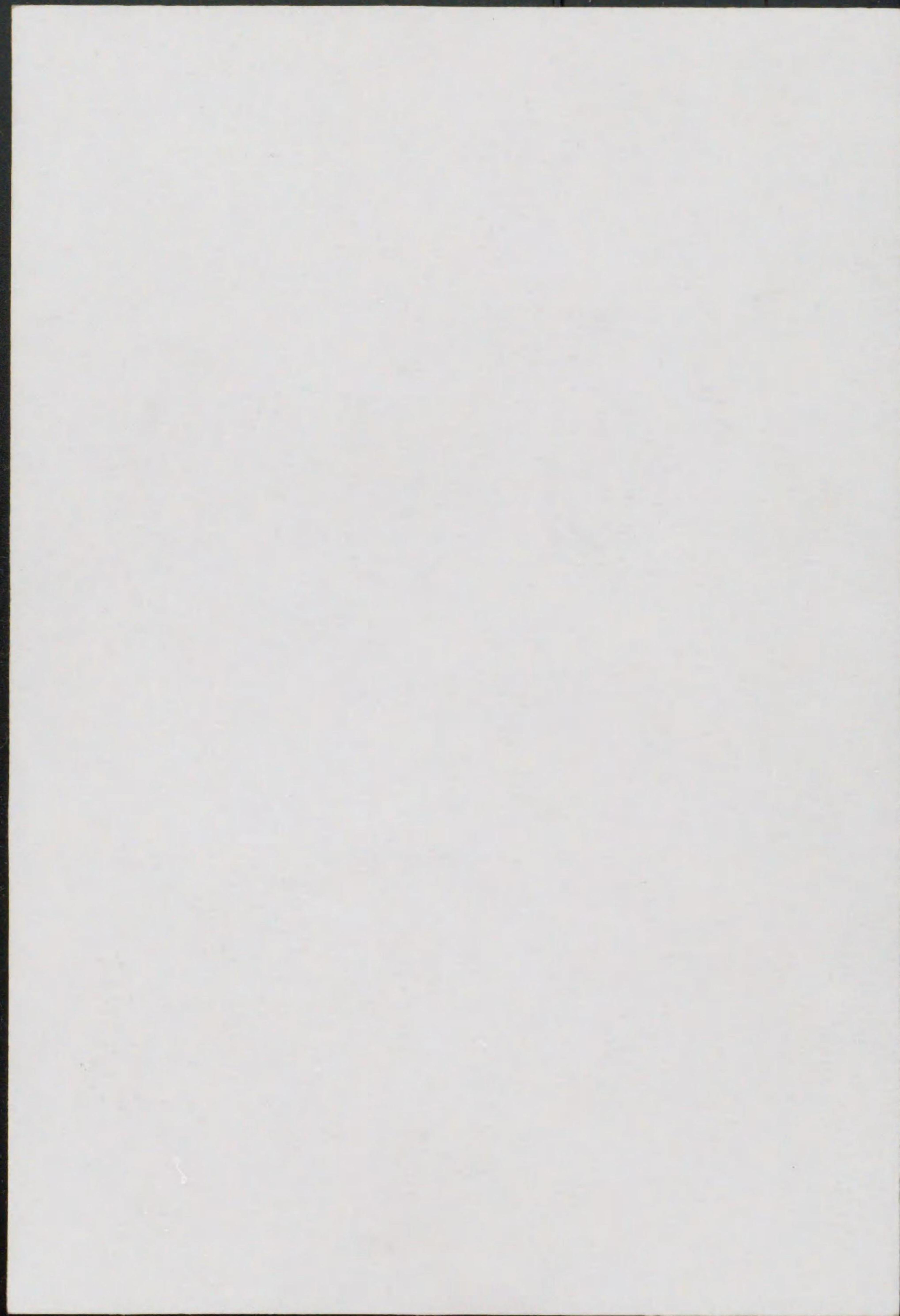
序文より「玩具の萬華鏡をぐるぐる廻しながら、内容の實體は畢竟此の玩具の中に入れたる硝子の破片と容の存在する微妙な反射作用によつて、若し讀者の脳裡に對照系統的な立派な映像が現すれば、そこに何等かの自然現象の豫報、科學者、藝術家、方則に就て、時々の觀念と「エントロピー」並に「アロピリテイ」の物理學と感覺、物理學實驗の教授に就て、科學上の骨董趣味と温故知新、怪異考と道具の進化對性原理、比較言語學に於ける統計的研究法の可能性に就て

現日本歌壇の闘士齋藤茂吉氏が心血を凝いで、年餘に亘つて漸く成つたのは本書である。輕薄動搖常なき歌壇の指導原理として、『寫生』の本義を力説したものは本書である。歌壇の數人を對手とし、猛然として彼等の言説を征伐したものは本書である。歌の道にある者は勿論、一道に徹したる著者の信念が凡ゆる藝術を愛するの士によつて味はれることを希ふ。

赤彦遺言！明治大正の短歌道に偉大なる足跡を残し、廣汎なる影響を與へたる彼赤彦は如何なる言を遺し、生活をして、如何にその深刻なる生涯を終りたるか。その藝術に對して、人生に處して如何に強く執拗に生きたるか。彼の創作態度はわれ、何を示してゐるか。今この書その愛弟子藤澤氏によつて成り、人間赤彦の姿藝術家赤彦の態度信念は遺憾なく傳へられた。かつて偉大なる藝術家は皆この書程眞實と熱情とを以て、その師を全的に語りたるものは古來稀である。諸君子の清鑒を望む。

鐵塔書院



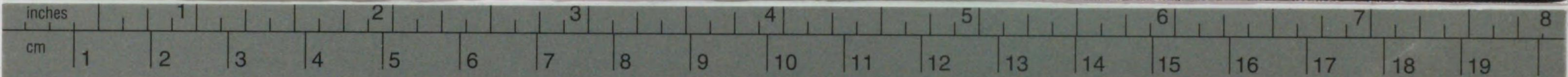
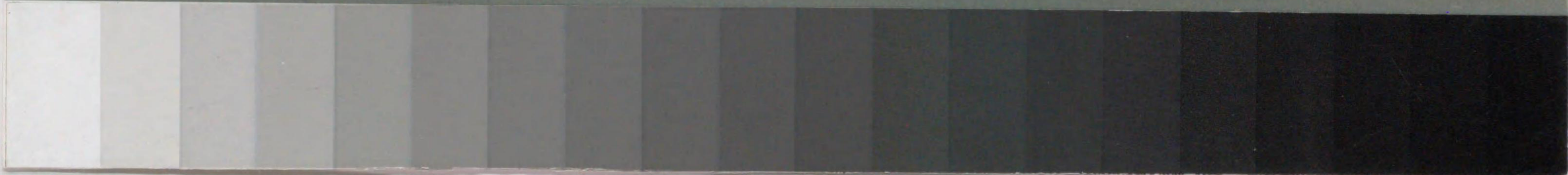


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

